平成30年度　有田町立有田中部小学校　学校評価結果

1　学校教育目標	2　本年度の重点目標
有田を愛し、夢や希望を持って、明るく元気に生きる児童を育成する。	①　教職員の資質を高め、児童の学力向上を図る。 ②　児童へのきめ細かな支援を行い、心の教育を充実する。 ③　望ましい生活習慣を身に付けさせ、心身の健康を育む。

3　目標・評価

①教職員の資質を高め、児童の学力向上を図る。

領域	評価項目	評価の観点 （具体的評価項目）	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題（左記の理由）	具体的な改善策・向上策
学校運営	○ 教職員の資質向上	・校内研究の推進 ・教師の授業力向上	・全職員で取組内容を共通理解して取り組むとともに、全クラスで実践的授業を実施する。 ・児童アンケートで、「授業が楽しい」の指標を85以上、保護者アンケートで「授業を工夫している」の指標を80以上にする。	・事前・事後の研究会も含め授業研究会に主体的に参加し、「楽しく意見を交流し合う授業」づくりに努める。 ・授業において、2人、3人、グループ、全体など必要に応じて話し合いの種類を適切に設定し、授業評価を行い、自身の授業力の向上を図る。 ・今年度は各専門部が連携を取り合いながら研究発表会に向けた準備を行えるように組織を整備する。	B	・研究発表会に向けて、各専門部が動いた。校内研修では、誰もが意見を述べられるように工夫した。 ・「授業は楽しい」75%で「わかる授業」が行えるように指導改善が必要である。 ・「授業を工夫している」72%で、授業の工夫が保護者には見えにくかった。	・外国語の指導については、スモールトークの研修や小中連携を図りながら、学校間の滑らかな接続を図りたい。 ・外国語活動の指導に加えて教科指導についても指導力を向上させる校内研修を計画し、「わかる授業」づくりに努める。 ・教育センターなどの講座や研修会に職員を積極的に参加させ、授業力の向上を目指す。
	● 業務改善・教職員の働き方改革の推進	・業務効率化の推進	・単純な前例踏襲ではない、効率的な業務遂行を工夫 ・各担当業務の情報共有を強化	・各専門部で業務量を分担しながら個人の負担に偏りが出ないように工夫する。 ・　朝礼や業務上のコミュニケーションを大事にし、それぞれの業務の進捗等の情報を共有し、職員間のフォロー体制を強化する。 共有フォルダを利用し、様式、業務データの共有化を行い、効率的な業務遂行に努める。	B	・出勤・退勤時間をパソコン管理をするようにした。時間外勤務時間が一目でわかり、職員の意識改革にも生かせる。 ・業務分担の均衡化を図っている。 ・職員の負担を減らすために、行事の精選とスリム化を進めている。 ・一部の職員の退勤時刻が遅い。	・校務分掌を複数の職員で行えるように、教員の配置を工夫する。 ・全職員に「勤務時間に関するガイドライン」を周知・徹底を行う。 ・様式、業務データ等の共有化がしやすいように共有フォルダ内の整理を進める。 ・働き方改革についての研修を設けたい。
教育活動	● 学力の向上	・個に応じた指導の充実による基礎学力の向上	・CRTで各学年の得点率平均を全国同等か、それを上回るようにする。 ・12月県調査では、各学年の平均を県同等か、それを上回るようにする。	・「西部型授業」の授業の流し方を基本にし、児童に分かりやすい授業づくりを目指していく。 ・算数科で単元により、少人数指導や習熟度別グループでの指導を計画・実施する。 ・各教科における基礎的、基本的な知識を獲得させるとともに、それらを活用できるような表現の方法を練習させる。 ・読書タイムなどを通して図書に親しみ、児童一人で年間80冊以上借りるよう励行する。 ・家庭学習の手引きを全家庭に配付し、有効に活用することで、家庭学習の習慣化を図る。	B	・12月県調査では、国語・算数において5・6年は県平均程度である。4年は、国語・算数共に県平均を下回っている。 ・CRTは、1～4年は全国平均程度、5・6年は全国平均を上回っている。 ・全体的な傾向として、国語においては、根拠となる記述に自分の考えを添えて表現すること、算数においては活用問題に課題がある。 ・一人当たりの読書量は平均80冊以上になった。	・来年度も外国語活動の校内研究であるが、他の教科指導についても計画的に研修を行う。西部型授業を実践する。 ・国語では、読解力と表現力の向上に重点を置いて指導する。 ・読書に親しみ、今年度以上の冊数を目指す。 ・算数スキルタイムで基本の徹底を期す。 ・「有田っ子スタイル」を使って学習規律の指導を行う。 ・家庭学習の習慣化を図る。
学校運営	○ 開かれた学校づくり	・地域と連携した体験活動の推進	・地域の人材を活用した体験活動を通して、地域との連携を進める。	・教育活動に地域人材を活用し、地域のよさを体感させる。 ・体験活動で得た知識・技能をはじめ、身に付けた能力を発揮できる場の工夫などを行っていく。	B	・有田陶器市の見学や焼き物体験で地域人材を活用した。 ・教えてもらった技能を使い、焼き物を作成した。	・焼き物体験が中心であるが、他の体験活動ができないかを検討し、体験の種類に応じた人材との連携を広げたい。
		・積極的な情報発信	・保護者アンケートで「学校の教育方針・内容を概ね知っている」の指標を80以上にする。	・学校便り、学校メール、ホームページ、各種会合等の機会をとらえ、情報発信の機会を増やす。 ・学校便りで外国語教育に関する情報を発信し、保護者の理解と協力を得る。	B	・「学校の教育方針・内容を概ね知っている」66%と情報発信をしているにも関わらず理解が広がらない。	・学校だより等による情報発信を定期的・継続的に行う。 ・学校の重点目標の開示をPTA総会の他にも知らせる機会を設けたい。 ・学校掲示など来校の際に目に触れられる工夫も必要である。

②児童へのきめ細かな支援を行い、心の教育を充実する。

領域	評価項目	評価の観点 （具体的評価項目）	具体的目標	具体的方策			
教育活動	● 心の教育	・いのちの教育、人権教育の充実	・児童アンケート「学校が楽しいですか」で、肯定的な回答の割合を75%以上とする。 ・保護者アンケート「お子さんは、『学校が楽しい』と感じていると思いますか。」で、「とてもそう思う」の割合を50%以上とする。	・道徳の授業の充実を図り、「いのちの教育」「人権教育」の充実を図る。 ・週に一回、「気にしたい子の共通理解」を行い、特に大きな課題を抱える子供については、個別に解決策を探る。 ・Q－Uアンケートの結果に基づき、年2回の研修を行う中で、「いのちの教育」「人権教育」とも関連させながら取組を検討していく。	B	・保護者アンケート「お子さんは、『学校が楽しい』と感じていると思いますか。」で、「とてもそう思う」の割合を48%、肯定的な回答は80%である。 ・道徳教育や人権教育の研修を校内研修の中に組み込めなかった。	・来年度も、児童の実態把握をするためにアンケート等を定期的に実施する。 ・子どもを支援する体制を充実させる。 ・道徳や人権教育の研修を校内研修の中に計画的に位置づける。
	○ 生徒指導・教育相談	・規律ある学校生活の確立	・学校のきまりや社会のルールを守るようにする。特に、本年度は元気な挨拶ができるよう指導を強化する。	・廊下歩行、トイレのスリッパ並べ、無言掃除などについて、全校集会や学年集会で常に意識付けを行う。また、全職員で臨場指導を行い、委員会活動等で児童の自己啓発を促す。 ・児童の生活の様子について、2か月ごとに全職員で評価を行い、常に改善を行う。	B	・校内の廊下歩行については、多くの児童が意識して歩くようになった。挨拶も随分できるようになったが、自分から進んで言えるように意識付けをしたい。	・生活委員会の呼びかけや取り組みを有効に活用し、児童の意識を変えていく。 ・月ごとにめあてを変えずに、生活の重点目標を年間を通して実践させる。 ・全職員で統一した指導を行う。
		・教育相談の充実	・児童アンケートで、「悩みがあったとき、相談する友だちや先生がいる」の指標を85以上にする。 ・相談内容を的確に把握し、SCやSSWとの面談や専門家との相談につなげるなど、連絡・調整の機能を適切に果たす。 ・早期にSCやSSWと相談しながら対応するように心がける。	・児童や保護者が気軽に相談できるよう、お便り等での情報発信を増やす。 ・月末に一か月間の気持ちを振り返る「月のこころ」を実施し、日頃から気持ちを素直に表現することや困った時には相談してみるという雰囲気づくりにも努める。 ・相談担当者が担任との情報交換や校内巡視の機会を増やして、児童理解に努める。	A	・「悩みがあったとき、相談する友だちや先生がいる」の指標は81%であった。 ・連絡会等で教員間で情報を共有し、必要に応じて、教育相談担当やSCと連携を図りながら対応できた。 ・個別に対応が必要な児童には、教育相談担当と管理職が主に関わった。	・相談担当者が担任との情報交換や校内巡視の機会を増やして、児童理解に努める。 ・月に一度の「月のこころ」を今後も実施し、児童の実態把握を行い、早期の発見と対応に心掛ける。
	● いじめの問題への対応	・いじめの早期発見・早期対応に向けた体制づくり	・保護者アンケート「学校は、いじめ防止に向けた取組を適切に実施しているか」で、肯定的回答の割合を75%以上とする。	・いじめに関するアンケート、教育相談週間を実施し、状況把握を適宜行っていく。 ・月末に一か月間の気持ちを振り返る「月のこころ」を実施し、人間関係での悩み等をできるだけ早い段階で掴んでいくようにする。 ・年2回のいじめ防止強化月間の取組や保護者への周知を通して、いじめ撲滅の意識を高める。	A	・今年度のいじめ事案認知数は、12件であったが、早期に対応し、全て解消できた。 ・職員の情報共有ができており、複数の教員で対応できた。	・今後もいじめアンケートや「月のこころ」を有効に活用し、早期の発見と対応を継続して行う。 ・連絡会等で、職員間で情報を共有し、共通理解をした上でチームによる対応を心掛ける。
	○ 特別支援教育	・校内支援体制の充実	・児童一人一人の教育的ニーズに応じた指導及び支援に努める。	・5月と2月にｱﾝｹｰﾄを実施するとともに、検査や参観等で支援を必要としている児童を把握する。 ・昨年度、「要支援」として名前の挙がっていた児童について、今年度の変容を探り、今後の支援について検討する。 ・個別の教育支援計画、指導計画の作成及び活用を進める。	B	・個別の教育支援計画や指導計画を基に指導を行った。 ・担任教諭と児童に関しての情報共有を図り、巡回相談等を活用し、個別指導が必要な児童を把握した。	・特別支援コーディネーターを中心に学校内外の支援体制を充実する。 ・学級において個別に指導が必要な児童に対しては、必要に応じて級外や支援員を配置する。

③望ましい生活習慣を身に付けさせ、心身の健康を育む。

領域	評価項目	評価の観点 （具体的評価項目）	具体的目標	具体的方策			
教育活動	● 健康・体づくり	・児童の体力向上 ・望ましい生活習慣の形成	・体育的行事に「進んで楽しく参加している」児童の割合を増やす。 ・「早寝・早起き・朝ごはん」を奨励し、保護者アンケートの結果で、肯定的回答の割合を90%以上にする。	・持久走やなわとび月間等を設定するとともに、「外遊び」を励行し、楽しく体を動かす機会を増やす。 ・「早寝・早起き・朝ごはん」についての児童の自己チェック週間を年間2回実施し、意識付けを図るとともに、保護者への啓発を行う。 ・規則正しい生活習慣の大切さを学級活動で指導する。	B	・「早寝・早起き・朝ごはん」82%で目標には届かなかった。 ・体育委員会を中心に、球技や持久走、なわとびなどの取組を行った。 ・学級だよりなどで、生活習慣について規則正しい生活をするよう呼びかけた。	・「早寝・早起き・朝ごはん」の励行を児童と保護者に引き続き啓発する。 ・「外遊び」については、個人差があるのでなるべく全員が参加するように働きかける。 ・保健体育の授業を充実し、健康の大切さを知らせる。
	○ 低学年の学習環境の改善・充実	・低学年の基本的な学習・生活習慣の育成	・「あいさつ・返事をきちんとする」「立腰でよい姿勢ができる」の定着を図る。	・全校での共通した「生活のめあて」として具体的に取り上げながら、継続して指導していく。 ・「有田っ子スタイル」を活用して、基本的な内容を統一して指導していく。 ・学級通信や学年通信で、学校での取組を知らせるとともに、保護者への協力を依頼する。	B	・「立腰」の声かけで、姿勢を正すことができるようになった。 ・あいさつは、まだ個人差があって、現在も指導をしている。	・「立腰」の姿勢の持続を目指すため、授業中も頻繁に声かけをしていく。 ・あいさつは、家庭の協力が不可欠なので、通信等で適宜状況を知らせる。

●は必須項目、◎は特定課題、○は独自評価項目